



1988年(昭和63年)
4月号(No. 514)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 屋久島の縄文杉は今……
羽賀克己……(1)
- 海外の山……(2)
- 「28 年前」
「チョゴリザ頂上の人形」
木暮碑史に重要資料
河野幾雄……(3)
- 自然保護随想……(4)
- 東西南北……(5)
- 「木暮碑前懇親会報告と予告」
「三水会竹寺山行」
三国合同登山隊事務局だより……(6)
- 図書紹介……(6)
- 「現代の冒険(上)」
「ボクのザイル仲間たち」
「わが白山連峰」
三国登山会募金応募者ご芳名……(7)
- 報告……(8)
- 予告
ブロック懇親会(北海道)……(10)
- 会務報告・ルーム日誌等……(10)
- 望月達夫文庫目録(1)……(12)
- 図書受入報告(図書委員会)……(13)
- 新入会員・住所変更等……(13)
- お知らせ……(14)

屋久島の縄文杉は今……

羽賀 克己

昭和四十一年に屋久島山中で発見された縄文杉は、樹令七千二百年説が公にされるや、ヤクスギ中のヤクスギとして、世界最長樹令の古木としてたちまち世の注目を集めることになった。地元では、見物し易いようにと登山道を近くに付け替え、周囲に繁っていた樹木をすべて伐り払ってしまった。以来、毎年およそ六千八百名の人々がこの老杉との対面に訪れている。中には樹皮を引き剥がして記念に持ち帰る者もあり、幹に着いて生きていたコケやシダなどの着生植物は手の届く範囲が消えた。伐開され、踏みつけによって露出した周りの土壌は、年間一万年

を越える多量の雨で流失し、樹高三十メートル、根廻り四十三メートル、胸高直径五メートルの縄文杉を支える根系は地上に裸出した。このままでは倒壊枯死の懼れがあるとして、環境庁の補助を受けた鹿児島県が保護対策の工事をしたのは昭和五十九年度から六十六年度にかけてのことである。

縄文杉が世界に冠たる樹令を保ち得たのは、周りに繁茂する植生と一体になった屋久島奥岳地域の生態系の一員として、あたかも周囲の植生に護られるような形で人間の影響を免れることができたからである。現在この杉と対面するためには、徒歩四時間を含む片

道およそ五時間の行程が必要であり、そのことによって対面者数が抑制されているのだが、それでいてさき前記のとおり保護対策が必要になったのである。そしてこの保護対策は、現況の登山者数を前提とし、周囲の生態系をも合わせた縄文杉の維持をめざしたぎりぎりの均衡点でなされたものである。

地域の活性化を図る観光の目玉として、縄文杉を目がけたロープウェイの架設計画が地元町によって進められようとしている。縄文杉の生えている場所は霧島屋久国立公園の区域内であるが、計画地は国立公園区域外の国有林であり、法的な制約も少ないというわけである。計画が実現すれば、終点から一時間弱の歩行で世界最長樹令の古木縄文杉に対面できる。容易に到達でき大勢の人が見物に押しかけるようになれば、貴重な税金を投じて維持しよ

まい。

アメリカ合衆国では、セコイアの巨木群をめぐる環境が人間の影響によって悪化しているため、巨木群の中にある「村」を撤去することに決めたという。わが民族の歴史をはるかに越えてひっそりと生き続けてきた世界の至宝ともいふべき縄文杉を、陽当たりの経済活動の対象として見世物にし、それをとりまく精緻な自然の生態系まで衰退させる権利が、いつ、誰によって、現代の日本人は与えられたのだろうか。

地球上最大の生物といわれる巨木群を将来の世代に伝えるため、人間の影響を遠ざけようとする姿勢と、世界最長樹令の古木の存在を誇りにすると言いつつ金儲けの道具にしようという彼の違いは、そもそどこに起因するものであろうか。制度の違いとか貧富

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

うとしている人間と生態系の均衡はたちどころに崩れてしまおう。計画地が国立公園区域外だからといって、法の盲点をくぐるようなやり方がそのまます認されるものではある

お知らせ
セーブ電話

234 六六五九

二十八年前

の差などでは断じてない。それは、歴史観、自然観というすぐれて精神的な、国として民族としての文化の成熟度の差違に帰結するような気がする。一挙手一投足が世界中に波紋を起こすまでの経済力を持つにいたったわが国は、何よりも、精神文化の成熟を諸外国から求められているのである。

筆者は、今からおよそ二十年前の厳冬に屋久島を訪れ、思いがけない豪雪や沢の増水に遭遇し、二晩の小屋泊りと二晩のビヴァークを体験して山を下りたことがあった。年末から正月にかけてのことである。憔悴し足を引き摺って歩く浮浪者のような姿を見て親切に呼び止め、バスが来るまではたつぷり時間があるから休んでいけ、と自宅に招き入れ、お屠蘇がわりにと梅酒を出してくれた人があった。質素ながらも清潔な家のたたずまい。それにもまして優しく温かい島の人情に触れ、山登りの挫折などを忘れさせる収穫を得て島を離れたものであった。あの日からすでに長い長い歳月が流れ、世間の風潮が変わったとはいえ、屋久島という豊かな自然の恵みを受けて生き続ける人たちのすべてが、優しく温かい、そして質素さを大切にする心を失ったとは思いたくない。世界の至宝であるたった一本の古木「縄文杉」に頼らねばならないほど精神的な貧困に陥っている

昨年暮、中国の有名な登山家、王富州が埼玉県大宮市の加藤保男の墓を訪ねた。八〇年の日本山岳会チョモランマ登山隊で中国側連絡官をつとめた王は、一九六〇年、世界最高峰の第三登をなしとげた中国隊の登頂リーダーである。

未明の登頂で写真が撮れなかったこと、高度八六八〇メートルのいわゆる第二ステップを裸足で登はんした、と伝えられたことなどから一時は登頂そのものを疑う声が西側の登山界から出た。いや、日本を含めてほとんど信用しなかったに近い。もう随分古い話になるが、そういえば王さん、あの時の登頂の様子はどうだったんですか？と墓参りを終えて山岳会メンバーが尋ねた。

実は、八年前、チョモランマのベース・キャンプで詳しくその話を聞いたことがある。二十八年も昔となるとまだ生まれていなかったクライマーもいるだろう。登山史では知られた話だが、この際ふれておきたい。

総勢二百三十人という中国独特の大登山隊は、六人から成る第一次アタックに失敗、第二次隊として王、屈銀華、ゴンブ、劉連満の四人が頂上を目指した。第二ステップ上部の、わずか二十メートルの岩場を乗り越すのに五時間、その際、トップの屈は、アイゼンと靴を脱ぎ、劉の肩に乗って難場を切り抜けた。無論、すぐに靴をはき、登はんを続行、疲労の激しい劉を八七〇〇メートル地点に残し、五月二十五日午前四時二十分、頂上に立った。

王富州によれば、第二ステップの上は平坦で、「トラックでも走れる広さ」があり、前方の急な雪面や岩場も

第二ステップに較べれば、難しくなかったという。ただし、長時間の登はんで王、屈の二人は凍傷にやられ、下山後シガツエの病院に四ヵ月入院するハメになった。王は右手指、左足指の一部をなくすのみで済んだが、屈は十本の手指全部と足のかかとから先の部分を失った。鉄底の特別な靴をはく屈銀華には、今も毎年一足、国家から靴が支給されているとの話だった。

中国ではベース・キャンプのことを「大本営」というが、二百人以上の人間が三ヵ月も頑張り続けたその大本営には男女十五人ほどの歌舞団の一行が来て隊員達を激励したり、映画上映班が毎晩のように映画を見せたり、にぎやかなものだったらしい。

当時なぜ登頂が疑問視されたか、という点については「あの頃は中国のことは何でも信じなかった国際情勢があったのでしょ」と言い、「登ったことは自分が一番知っていましたから」とつけ加えた。毛沢東の写真と中国国旗を頂上に埋めたそうだ。

王の話は離れて言えば、一九六〇年は、ダライ・ラマ十四世がチベットを脱出、インドに亡命した翌年である。実はその一九五九年にソ連との合同登山が計画されていたが、チベット問題のため棚上げされ、翌年、中国隊だけでの挑戦となった。騒然とした情勢の中で登山行動がよく行なわれたと思うが、隊員の約三分の一はチベット人だったから、あるいは民族融和の意味も多分にこめられていたかもしれない。

王は一九七五年、中国隊による二回目のチョモランマ挑戦にも参加、隊の党委員会書記をつとめた。河南省の平原に育ち、幼い頃山を見たことのない男が地質学を学びつつ山に親しんでゆく話が面白かった。(江本嘉伸)

とは、どうしても信じていることができない。
(熊本県阿蘇郡阿蘇町坊中)



木暮碑史に重要資料

河野 幾雄

毎年五月、金峯山麓の金山平で行なわれてきた木暮翁の碑前祭も本年(一九八八)は二十六年目に入る。ここ数年の間に参加者の顔ぶれがだいぶ変わって若い人が多くなり、木暮碑の由来を知る人も少なくなった。そこで昨年千葉県検見川にご健在の小野幸会員にお願いして碑建立までの事情を明らかにして戴いた。(山岳第八十二年「木暮碑

海外の山

チヨゴリザ頂上の人形

平井 一正

「何か記念にと秘かに持ってきた、子供が書いて送ってきた私の似顔絵を、布で作った小さい女の子の人形と一緒に、頂上の岩の下に押し込んだ。いつになるか判らぬが、誰かが再び頂上に登った時に発見するだろう……」
これは一九五八年、京大学士山岳会のカラコルム遠征隊が、チヨゴリザ(七六五四m)の初登頂に成功したときの藤平隊員の手記である。
頂上は一坪ぐらいの広さで岩屑でおおわれ、北側に三〇センチぐらいの高さの岩がでている。似顔絵と人形はその岩の下に埋められた。
その人形が二十八年ぶりに発見された。

文次の如し。

「前略 突然失礼ですが石のことで色々御教示に預りたく一筆申上げます」

実は八年前前木暮理太郎氏の浮彫り肖像を作り 秩父金山の岩にとりつけましたが甲府の三井松男兄始め地元の方々や山梨県観光課の協議によりその肖像を一般登山者に親しみやすい場所に移転することになりました

それで一昨日から三井兄と現地に参り検分して参りましたが肖像をはめこむ手頃な石がその近くに見当りま

一九八六年六月二十二日、二十三日の両日、北東稜を経て、スペイン隊がチヨゴリザの頂上に立った。「頂上でわれわれは、日本の子供の服を着た小さな人形を発見した。二十八年前の日本の遠征隊によるこの北東峰への唯一の登頂のあかしである。」と報告にある。(A.A.J. Vol. 29, 1986) 実はチヨゴリザ北東峰へは、一九七六年、ドイツ人 J. Vogt が単独で登頂したが (DOAV, Bd. 102, 1977), 今や、このときは人形はうまくかくれていたらしい。(Vogt は無許可登山と思われる) 発見されたのは人形だけで、似顔絵はどうなったのか、報告でふれていないが、ヒマラヤの頂上に埋められたものが、14世紀以上を経て再び発見されることは、ヒマラヤ登山史上でも珍らしいことではなからうか。
今年チヨゴリザ登頂30周年に当たる。スペイン隊の発見は、チヨゴリザ登頂にまた新しいエピソードを加えた。

海外の山

せん 近くに溪流がありそこに大きな石もありますがこれらを候補の石にするより大谷石を選んだ方が石自体温か味があり却って引ききたつ様に思われます 私は一度大谷石を用いて肖像をとりつけた経験を持っていますが好評でありました それで運搬の問題であります甲府からトラックで目的地の距離一〇〇〇米手前位まで輸送することが出来る この一〇〇〇米は幅四、五尺の道路があり登りも高度二〇〇米位と思はれます就きましては

一、大谷石は帝国ホテル等に用いた

うす緑色の外クリーム系の色の石などあるものでせうか

一、仮令ば高さ三尺横幅五尺厚さ一尺二寸とか それより多少大きな石を特に採掘して頂けるでしょうか
急ぎ御返事を頂き折返し御配慮お願い申し上げます

輸送については貨車積みのもその梱包の具合もトラックによる運搬も又山道の動かし方も不詳でありますからこの辺のことも御教示賜わり度存じます

又東京営業所に御紹介被下らば幸甚に存じます 敬具

私は早速大谷に渡辺会員をたずねて話をきいて来た。要約する。

一、風雨蝕に大理石よりも強い地下三百米の深層大谷石を採掘した。

二、これを五箇に分けた。碑面用として一箇(縦・横・幅三×五×一・

五尺 重量一一五〇・)土台用として四箇(一×六×一尺と一×二×一

尺のもの各二本 全部で八〇〇・)これを厳重に梱包し日本通運に依頼

して貨車便で葦崎駅止めで発送した。総重量は二トンを超えた。

三、発送したのはたしか手紙から一カ月後の八月末であると記憶する。

四、葦崎からは荷馬車で増富温泉まで運び、そこから荷車に移して人力

(自然保護随想)

米国製のコーラの缶から

円高で輸入品の価格が下ったためであろうか、一部の食糧品店にアメリカ製のコーラ・コーラの缶が置いてある。日本製の缶よりやや大きく目で値段は、ほぼ同じだが、日本製との違いは、飲み口のタブが取れないことだ。

実物を見たことがない人には、わかり難いことだが、日本製のコーラ、ジュース類、ビールの缶も同じ構造だが、飲み口のタブを引くとなるとパカッと取れて、手頃な大きさの口が開き、誠に具合が宜しい。しかし取れたタブの始末に甚だ困る。無頓着にか、うっかりか、その辺にポイと捨てることになる。

ところがアメリカ製の缶は、飲み口のタブを引くとなると、タブの半分が缶の中に引っ込み、半分が缶の上の飲み口の端の方に直角に立って、缶からは離れない構造になっている。タブは取れないから空缶の回収には都合がよい。環境面を考えて誠に合理的と感心する。しかし飲

(日本山岳会山梨支部の会員)で運

んだときいている。

五、除幕式に招かれたが夜遅く金山に着いたので式には出なかった。

いったい費用はどの位でしたか、という私の不躰な質問に渡辺氏は笑って

「三井さんには山でお世話になりましたからねえ……」と言葉を濁された。私は心の中で、無償だな!と感した。

お三人とも慶應山岳部では先輩、後輩

む人から見ると鼻先に直角に立っているタブは、ちよつと気になる存在ではあろう。アメリカ人は全く気にしないらしい。鼻の高い外人でも、タブで怪我をしたというような話は聞いたことはない。

この二月にヨーロッパに行った。スイスの田舎町のコープでも、パリの裏街の食糧品店でも、売っている缶ジュース、コーラの缶はいずれもタブが取れないアメリカ型の構造であった。そこでハテ、むしろ日本のタブが取れる缶の構造は例外ではないかと考え込んでしまった。日本でも空缶の回収は声高に叫ばれているが、タブの構造をみても、建前論だけで、製造も販売も勿論だが、行政も真剣に取り組んでいるとは言いがたい。欧米のタブが離れない缶の型こそ環境重視の合理的な構造である。コーラの缶の構造ひとつにも欧米と日本の環境問題に対する哲学の差が現われている。

自然保護は人間性を無視すると破綻する。これからの自然保護運動もジュースの缶の構造のような小さい問題から見直す必要があるであろう。

(関塚貞亨)

の間柄であるからだ。

対談の席には、誤りがあつてはならぬという渡辺氏の配慮から、実際の仕事を指揮した城山山岳会の高山会長も列席された。当時の帳簿が残っていた。石の寸法が判った余徳もあった。

(昭和六十三年一月稿)

次代に残そう美しい山と溪



木暮理太郎翁

碑前懇親会の

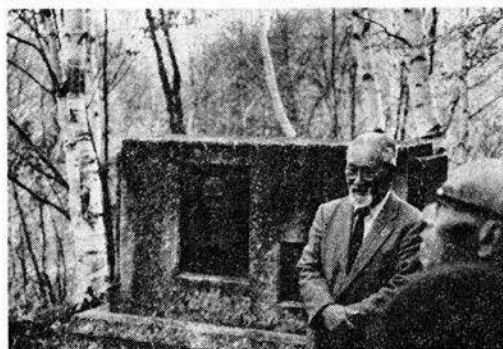
報告と予告

第二十五回木暮翁碑前懇親会は、例年にならい、昨年五月十六日、山梨県須玉町金山平で行なわれた。

今回は二十五回目ということで、特に佐々保雄名誉会員にご足労を願った。氏は、日本山岳会入会の際の紹介者が木暮先生であり、蔵王の清溪小屋の看板を初代木暮先生揮毫のあとをうけ二代目をかいたことなど、旧懐の念を込めて話された。

木暮先生がなくなられて早や、四十三年、生前のお声やお顔をご存知の島田異名譽会員、鶴岡元之助霧の旅会員などのお話は印象に残った。また来年は無理だろうといひ続けておいでだった山崎金次郎氏の本当の欠席は残念であった。

夕陽に映える金峰山の頂稜をバック



第 25 回木暮碑前祭で挨拶する佐々名譽会員

にした碑前祭を終り、懇親会には有井館の新館で行なわれた。堀口丈夫料理長の指図でつくられた山菜料理は、毎度のことながら見事。特に今回はイワナの骨酒が好評であった。

なお左記の寄贈品のあったことを記録し、感謝の意を表したい。

清酒二升、近藤友好氏、同各一升、佐々保雄氏、金山淳二氏、神田恒子氏、ワイン各二本、鶴城山岳会殿、近藤信行氏。中国酒一本、乾能尚氏。煮貝二ツ、三井文恵氏。

明けて十七日、記念山行は、長駆御坂山塊の蛾ヶ岳(ひるがたけ)を目指した。車の終点、四尾連(しびれ)湖に着くと大雨。湖畔の旗亭に入れば、何処ともなく湧いてくるアルコールの

数々。またまた大宴会となった。

雨はやまず、心ならずも下山。途中で県立考古博物館に立ち寄り、思いを古代に馳せ、来年の再会を約し流れ解散した。

参加者 金子弘枝、小塩丘平、小松崎幸子、片岡博、今井喜美子、岩堀瑞子、神田恒子、鶴岡元之助、佐々保雄、坂倉登喜子、庄司長生、小林基子、前田清子、乾能尚、河野幾雄、斉藤健治、山村秀子、宮下啓三、岡部みち子、浅野篤、山本稔、高田真哉、平井和雄、原謙一、島田巽、篠原健夫、遠藤靖彦、田村英也、近藤友好、近藤久子、金山陽子、小松崎和子、荒野康子、石間信夫、斉藤敏男、小林啓助、里見清子、中村久美子、加田勝利、山本正隆、小川喜久、山本博晴、今井洋地、堀口丈夫、石垣政雄、山村正光、計四十六名 (写真と文・山村正光)

さて、本年第二十六回は次の要領で行なうので、賑々しくご参加いただけますようご案内申し上げます次第であります。

日時 五月二十一日(土)から二十二日

場所 山梨県須玉町金山平

宿泊 右同有井館 TEL 0551-515015

交通 JR中央線韮崎駅下車、バス増富ラジウム温泉行き終点下車後徒歩一時間半(タクシーの便あり)

行事 1、碑前祭十七時より 2、十

八時より有井館にて懇親会 3、

二十二日、高須林道より清里を経て天女山(てんによさん)一五九二の登山(徒歩一時間) 帰途、NHK大河ドラマ「武田信玄」オープンセット見学後、JR小淵沢駅にて解散

会費 一泊二食、山行交通費、記念品

代共一人八千円

申込 〒200 甲府市武田三ー六ー二七

TEL 0551-513175 山村正光

締切 五月十七日まで

定員五〇名

三水会竹寺山行

小野 利次

二月六日(土)ー七日(日)、恒例の十回「竹寺」は天気恵まれ総勢二十人。

境内はみつまた、寒椿、紅梅、白梅が早春のいぶきを漂わせていた。

夜は大広間で十年の永い間に亘ってご協力と歓待を受けてきた大野住職に、記念品の贈呈でわれわれの感謝の意を表した。

あとから、あとから運ばれてくる山菜、薬湯に、飲む程に酔う程に興味が盛り上った。

竹部屋に席を移し、勝田さんの流れ

るようなマジックに目をみはり、平野さんの竹箸を使った昔なつかしい演歌師、弦の使い方も堂に入った手さばきに時のたつのを忘れさせた。

明けて七日は昨日とは打って変わった快晴。竹の緑も朝日を受けて眩しく輝いている。

今井さんは所要のため、他の一人の方と下山。

われわれはゆっくりと、「日だまりコース」を一路豆口峠へと向った。

峠は伐採により景観が一変し目をうたぐった。

雑木林の稜線に出るとそこは風が吹き荒れていた。

葉を落して明るい樹林の中から奥武蔵の山々が見えかくれしている。

子の権現の屋根が杉林の中に望める日だまりで大休止。

社前にぬかづいて、いつまでも山歩きができるよう一同祈願。

緩い下降を続けると浅見茶屋が現れた。

軽い山歩きの昼食は腰の強い手打うどんをとるのがまた楽しみの一つでも

三國合同登山隊事務局だより

三國友好登山隊

チヨモランマ生中継放送予定

四月二四日 一五時三〇分～一六時五五分

事前特番「これがチヨモランマだ」

ある。

程よく乾いた喉にビールの味も格別である。

遠近に咲き競う梅の香にむせびながら部落を背に日を浴びながら進むと、

もう吾野の駅は近い。

昨年、鶴岡先輩は体調を案じての下山であったが、本年は終始元気で全行程を確実な足どりで歩かれたことはわ

図書



紹介

現代の冒険 (上)

山・極地・河

クリス・ボニントン著

田口二郎・中村輝子訳

アンナプルナⅡ、ヌブツェに初登

頂、またアンナプルナ南壁、エヴェレスト南西壁の初登。パーティーを率いた

ボニントンの一九八一年の著。戦後

れわれの何よりの喜びであった。

参加者 乾、岡野、小野、河野、鶴岡、勝田、牟田、平野夫妻、横溝、今井、沼倉、坂倉、ほか十三人

のさまざまな冒険のヒーローたちに面接し、手紙で接触して、ボニントン自身が書きおろした記録十一編から成る。

「さまざまな冒険」として彼が選んでいるのは、その時点で必要最小限と判断される補助手段だけを使い、肉体的な技量にたよって、未知と危険を克服した八旅Vである。八旅Vには岩壁登攀から月面着陸までがふくまれる(下巻の副題は「海・空・洞窟・宇宙」)。

山の部の中ではやはり著者自身が取りついたアンナプルナ南壁の記事に臨場感がある。しかし私はティッヒーの

今年もさげしで会いましょう

チヨ・オユー行に描かれたシエルパとクライマーとの暖い関係、また登頂前後の心理描写に最も心をうたれた。

この本の中身は、お茶漬けのようにサラサラとかきこめるわけではない。血のしたたるステーキの味だ。隊の組織をめぐる葛藤、登頂が近づくにつれて隊員相互の間に高まる緊張と嫉妬、リーダーシップをめぐる争い―登場者たちが織りなす人間模様には、私などは心情的について行けない頑固な自己主張の渦巻きがある。その根底にあるのは、強烈な自我と、自己決定・自律を至高とする個人主義への信仰だ。私たち日本人には容易に同化できない精神的風土である。

一九八七年十二月刊 岩波書店 定価二八〇〇円

価二八〇〇円

(木下是雄)

ボクのザイル仲間たち

小西 政継著

山学同志会の小西といえば、その名を世界に知られた名クライマーである。十八歳で本格的な山登りを志した

「ネパール側・ドキュメンタリー」

五月 一日 一四時〇〇分～一五時二五分

「ベースキャンプ、そこが知りたい」

五月 五日 一二時〇〇分～一三時〇〇分

一六時〇〇分～一八時〇〇分

一九時〇〇分～二一時〇〇分

「チョモランマ交差縦走」

六月 五日 一四時〇〇分～一九時二五分

「帰ってきた男たち」

八月 一九日 一二時〇〇分～二三時〇〇分

「チョモランマのすべて」

※放映時間及び番組名が変更になることもあります。

三国友好登山隊『隊員手帳』を 限定二〇〇部販売!!

登山隊では、中国・日本・ネパールの隊員のチームワークと登山活動をより円滑にするために『隊員手帳』を編集いたしました。

この手帳を会員の皆様に限定二〇〇部、三〇〇〇円にて販売いたします。

手帳の判型は聖書サイズ(一八・八cm×一三cm)。頁数、二二八頁に行動表の折り込み付き。

本文用紙には耐水、耐候性のある合成紙「ユポ」を使用。

カバーはポリプロピレン素材の六穴バインダー。カバーの色は、ブルーバイオレット(北側隊員用)、オリーブ(南側隊員用)の二色。

内容、登山編では、日程表及び登山活動に必要な各担当からの基本とシステムの解説、キャンプ配置図、管

理表等。

資料編では、チョモランマ登山史及び報道体制についての説明。また、チベット語、中国語の会話集。

隊員名簿は顔写真入りで、中国・日本・ネパールの隊員を紹介しています。

JAC・ルームにて見本をご覧の上、ご希望の方は、

三国友好登山隊事務局(〒101東京都千代田区内神田一三三七 読売新聞社神田分室五階)宛、必ず葉書にてお申し込み下さい。

尚、先着二百名様にて締め切らせていただきますので、ご了承下さいませようお願いします。

三国友好合同登山会員募金応募者「芳名」

(三月十五日現在、一口五千元)

(二〇口) 三辺夏雄。(六口) 武村市太郎、明治大学山岳部。(四口) 村上勝太郎、太田晃介。(三口) 集会委員会。(二口) 関根吉郎、古市義孝、穴田雪江、森川洋佑、宅間清子、長谷川良典、片岡濱子、乾好、川越はじめ、金藤貞夫、佐藤武雄。(一口) 川端信治、清水日出勇、金子丞二、松岡正久、平井和雄、久保田明宗、砂田定夫、林桂子、祖父川精治、三谷忠男、河上鏗治、久保田優一、上原泰行、山口英一、高田知典、今井京子、岩瀬秀郎。

(累計一、七六八・一二口、八〇六名、金額八、八四〇、六〇〇円)

(訂正) 会報51号掲載の応募者名のうち左記の方々の名前が脱落しておりました。たいへん失礼申し上げます。ご海容のほどお願い申し上げます。

〔編集〕

(一口) 照内豊、勝田房治、広瀬貞雄、近藤保人。

以上の四氏です。

三国合同登山隊事務局より

小西は、一九六七年マッターホルン北壁の冬期第三登に成功し、この輝かしい記録をひたして、エベレスト、グランドジョラス、ジャヌー、チョゴリと数々の難峰、難壁を攀じ、そのエネルギッシュな活躍と栄光の登山歴はここに三十年を越える。

本書はその長い登山歴のなかで、それぞれの時代に、それぞれの山でザイルを結び合い、生と死の狭間をくぐり抜けた十人の仲間たちを語ったものである。

(1) 佐藤久一朗 人生のすべてをアイガー登攀に賭けた、山の大先輩

(2) 星野隆男 スター街道を駆け登った、世界最初の冬期三大北壁完登者

(3) パウラ・ビーナー 活躍の舞台を支えて呉れた、異郷の地のオツカさん

(4) 小川信之 ヒマラヤの怪峰、ジャヌー北壁の初登に成功した小さな巨人

(5) 植村直己 自然にも人間にも優しさを失わなかった偉大なる冒険家

(6) 田辺寿 エベレスト遠征の名指揮官は、下界の超エリートサラリーマン

(7) 今野和義 垂直の壁をいっきに駆け抜けた、未完の名クライマー

(8) (9) 吉野寛・禿博信 無酸素に

よる八千メートル登頂時代に終幕を引いた男たち

(01) 小西郁子 山と人生をとくに關

い抜いた、最良のパートナー

ここに登場する十人のうち七人は既にこの世にはいない。それほど世界を

目指す小西の登攀は厳しい。JAC会

員としては多少気になる発言もしばしばあるが、全編を通じて強い男の自信

に満ちた小西節が高らかにうたわ

ているように思う。筆者、今四十九歳、

四人の家族で奥武蔵の丘陵に住む。十

冊目の著書、好著である。

一九八七年十一月二十五日、山と溪

谷社、四六判、二七二ページ、定価

一四〇〇円 (小倉 厚)

わが白山連峯

長崎 幸雄著

世に多くの白山の名がある。モンブラン、ダウラギリ然りである。だが、加賀の白山「古名・しらやま」も勝れた姿である。なるが故に古来日本三名山の一つに数えられ、信仰登山の山として知られ、養老元年(七一七)僧泰澄によって開山、高山植物の宝庫、ブナ原生林が広く残り、山頂に白山比咩神社奥宮が鎮座する。修復された白山方位盤が故長崎幸雄氏の背で運びあげられたことは、地元、金沢の人でも知

る人は多いであろう。氏は昭和四十四年三月十一日若き頃修験者のように入り三十九歳の若さで今生と別られ、友人らによって遺稿が出版された。それが「わが白山連峰」である。

故人は、厳冬期、残雪期、尾根歩き、沢登りを好んだと云う。山行そのものは修験者の魂の登攀だったよう

だ。短かった人生の情熱を山にぶつつけ、文章にもその筋金がある。氏の登山に対する信条からも現代の人々の反省すべきことが少なくない。

白山々系登攀小史、白山を水源とする山と水、犀川の水害記録、犀川をとりまく山々等は、白山山塊と金沢を知る上の高級な事典でもあり地誌でもある。そしてまた、山に対する本能的記録に他ならない。

富山県厚生連滑川病院長小川忠邦氏に会って、故長崎氏の印象を聞いてみた。

現在のような管理登山を忌み、自由奔放にして登山の基礎技術に忠実であった。特に若き日の心身を犀川源流の名も無き山々で鍛え、精力的に踏跡を印しておられた、尊敬する一人であった。

一九八七年十一月十八日、北国出版社刊、三三〇ページ、定価一六〇〇円

(富山支部・石坂久忠)

報告

秋山々行報告

秋田支部

六十三年度実施予定の東北支部集合は、既に当支部主管のもとで県南部に位置する高松山群を決定しているが、その下調べを兼ね去る十月二十四、五の両日、同山群の小安岳(一三〇〇m)において秋山々行を実施した。

地図上では、登山道が稜線添いに山頂経由で記入されているが、実際は山頂直下を巻いており、したがってこれまでの大方の登山者は山頂を踏んでいない。

山頂への登山道が一昨年に新設され、泥湯温泉により気楽に登れるとあって即決定されたものである。

(二十四日)午後五時、集合地の泥湯温泉・小椋旅館に集まり、さっそく懇親会を開催。来年度開催予定の東北支部集会をテーマに山談議に終始し、珍しくも早々と就床。

(二十五日)雨音に起され、朝食後の八時当支部山行付きものの小雨の中を出発。ガスは中々晴れず、人けのない幽玄的なブナ林をしばらく辿る。抜けると数日前に降った雪が現われ、一同初雪に気分を良くし午前十時三十分

スローペースで山頂に到着。すばらしい眺望は来年に託しサッサと下山する。

宿で昼食をとり、午後から今ブームの秘湯「湯滝」へ。川原毛鉱山跡を下り、更に沢に降り立つと沢全体が温泉となつて流れており、特に大湯滝の湯の浴場を提供している。

午後四時過ぎ宿に引返し、無事山行を終る。

参加者 岡田光行、福田文二、進藤昭、佐藤兼治、北林嘉鶴子、打矢道雄、佐々木民秀、他会員外三名

(佐々木民秀)

支部だより

北海道支部

一、第二回海外研究会

三月四日(金)午後六時、札幌教育文化会館三階会議室に、北大低温科学研究所の山田知充氏を講師に迎え『ラ

ンタン溪谷からの山、人、自然』と題し、OHP、スライドを巧みに交え、専門の降雪の話に、ランシサ・リ(六三〇〇m)や、ランタン・リルン(七二四五m)の雄姿に暫し、ウットリ

。楽しき集いは、酒庵『つる』に移り、終電近くまで話が尽きなかった。

出席者 三浦勝幸、高松秀彦、橋本誠

二、石崎貞子、小林年、藤家壮一、森下雅幸、小野有五、辻井達一、中川悦子、有馬純、高沢光雄、中嶋英彦、藤野和男、今井三男、吉村啓一、高橋慶子、梶浦英子、山口斌、平野明、石井忠雅

二、スキー合宿

三月五日(土)、六日(日)の両日は、支部恒例のスキー合宿、後方羊蹄山南山麓真狩山丈荘で行なわれた。この集いに参加したのは、橋本支部長以下十一名、函館から参加の車を含め七台が山丈荘前に並ぶ。

午後六時、去る二月五日逝去された故兼平治水さんの霊に黙禱、夕餉のメニューは、ソウルオリンピックの年に因み、豆腐チゲ、塩漬豚肉を煮込んだポトフに、十二年物のスコッチ、ニッカピアモルト、ビール、清酒、ワイン等盛沢山。

翌六日は、モズクお雑炊で、「ござっぱり」の朝食後、昆布岳スキーツアーに、留寿都スキー場へと、各々の対応での合宿日程を終えた。

参加者 桜井仁、河村皆子、横田春雄、新妻徹、三浦勝幸、井出雅人、藤野和男、橋本誠二、沼崎勝洋、平野明、平野景子、平野繭子。

(平野 明)

日本アルプスの呼称

田 畑 真 一

一、命名事情の誤り

日本アルプスを世界に紹介したウェストン。こういうことになる、「日本アルプス」の呼称は、ウェストンが名づけたやに伝える文献があらわれる。それも後を断たない。たとえば中野博士らの編集になる『日本地名大事典』第四卷(中部)、このなかにもつぎの記事がみられる。

「このうち登山として最も早く開発されたのは北アルプスで、すでに江戸後期に槍ヶ岳に登山したことが伝えられているが、近代的登山としてはイギリス宣教師ウォルターウェストンが明治二〇年代に登山し、帰国後『日本アルプスの登山と探検』を出版したことから、『日本アルプス』の名称が生じた」

この記事は日本アルプスの地元、当時信州大学教授であった小林寛義博士の執筆である。ここでは『日本アルプス』登山と探検の出版と『日本アルプス』の呼称とを関連づけている。この関連によって、呼称が生まれたという。しかし、これは誤りである。なるほど前掲書により、日本アルプスが一部に知られるようになった事実はある。だからといって、呼称が生まれたという経緯はないはずである。しかも、これは後述するように、日本国外においてである。

教員研修会用資料のなかにすら、誤りがみられる。横浜市中学校教育研究会社会部会の編集する『松本・安曇野巡検』のなかにもつぎの記事がみられる。

「保福寺峠(一三四五峰)からの眺望はすばらしく、

ウェストンの『日本アルプス』命名の地ともいわれている」

ウェストンの命名とも読み取れる記事である。なお、保福寺峠が命名の地という事実はない。

二、小島島水ですら

命名者は、ガウランドである。もはや、定説となっている。諸家による見解も少なくない。私も先に私見『日本アルプスの命名者について』、『山』五〇一を發表した。したがって、ここでは縷説を要しない。

先に前掲書により、日本アルプスが知られるようになったと述べた。これとて、ロンドンで發刊されたイギリス人などを対象とした本である。当時、日本人など、その呼称について知り得る機会はなかった。なぜなら、小島島水ですら、つぎのように述べている。

「著者(田畑注、小島島水)は数年前、その怪奇なる山貌のために、博士チャンパレン(田畑注、チェンバレン)をして、いみじくも『日本アルプス』と呼ばしめたる大山脈に眼を転じ、かく数回探検の結果は、この国もいかなるところにも匹儔を見る可らざる壮嚴と、美麗を信ぜしめぬ」

これは明治三十七年九月、『中学世界』七卷十一号に發表されたものである。チェンバレンによる命名であるとの誤りがみられる。だからといって、島水を責めるわけにはいかない。先述のように、やむを得ない事情とみるべきである。情報が乏しかった時代である。誤りであることが、むしろ正しいとすらいえるかも知れない。チェンバレンの關係の紹介【チェンバレン『日本事物誌』(高梨健吉氏訳)】についてもあげることができる。つぎの通りである。

「日本でもっとも雄大な山塊は、信濃飛驒山脈である。

△予告△

昭和63年度
地方ブロック懇談会

期日 七月十六日(土)・十七日(日)
名称 日本山岳会'88大雪の集い
内容 旭川市内で講演会の後、バス、自家用車に分乗、大雪山麓旭岳温泉(旧湧駒別)へ、夕食懇親会。

翌日、大雪山主峰旭岳登山、間宮岳、中岳温泉、裾合平より下山

★詳細は、追ってお知らせします。

北海道支部

会務報告

二月理事会

二月五日午後六時三〇分

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、村木副会長、鴨原、浜口、松永、太田、関塚、織田、沢、岡沢、鈴木、早坂、勝山、西村、大森、大橋、田部井、橋本各理事、田監事、松田、平林、小倉、山野井各評議員
委任 大塚副会長、新井、小林各理事
審議事項

三国登山隊隊員変更等の件

日本アルプスの呼称

これは、高さが八千フィートから一万フィートに及ぶ花崗岩の巨人である。ウォールター・ウェストン師は、この登山を最初に一般的なものにした人だが、これをジャパニーズ・アルプスと呼んだ。この名称は今では日本人自身も採用し、ニッポン・アルプス(Nippon Alps)と発音している。

三、ウェストンいわく

黒岩健氏もつぎのように「日本アルプスという呼称、『岳人』四七九、述べている。

「ガウランドにとつての登山は、第二義、休日を楽しみ余技であった、というべきだ。『日本アルプス』という言葉は、ガウランドの遊び・余技の中から生まれてきたといえるだろう。ましてその発表舞台は、来日した外国人に向けて英文で書かれた日本旅行の案内書だ」

ここにもガウランドによる命名事情が伝えられている。しかも外国人が外国人のために、外国人向きに紹介したという。傾聴すべきお考えである。

ところが命名事情については、ウェストンも見解をあげている。私はこれを『日本アルプス—登山と探険』のなかにさぐりあてた。つぎの通りである。

「私はチェンバレン教授が数年前その景観を称賛した記事を読んで、この巧みにも名付けられた『日本アル

プス』Japanese Alps という大山系に、初めて注意を向けた。私は幾度もこの山系を訪れたが、八分の七も山から成り立つ日本でも、他にその比を見ない雄大と風景美とを、次々に発見した。然しながら、この辺の旅行は極めて困難なので、これ等の荒涼とした城砦は、日本全国が人間の手によって以前孤立していたのと殆ど同じ位に、自然環境によって今迄孤立していた『神秘国中の神秘境』だった。けれども、この帝国の全領域中で、このように多種多様な自然美を見出せるところは、ほかにない。何故なら、これ等の峰々には山腹に氷河こそないが、豊富な亜熱帯植物からアルプス的な雪に至る迄揃って、他に何一つ欠けたものはないからである。富士の円椎形の紫峰が白いマントを脱ぎ捨てた時でも、この『飛驒山脈』中の偉大な花崗岩の巨人達の多くは、尚もその山腹に輝く雪の衣を纏っているのである」

「この巧みにも名付けられた『日本アルプス』Japanese Alps という大山系」と述べている。アルプスと「日本アルプス」との類似点をあげ、これに敬服・感動をするとともに、呼称について評価する記事ともなっている。つまり、ウェストンによる命名ではない。この点が理解できるのである。

日本アルプスの呼称

南側隊員変更 柳沢昭夫・加藤智一

未決定南側隊員 植木一光と決定

*なお神崎忠男は今西総隊長の補佐として同行する

報告事項

関塚横浜ウェストン祭の係りは関塚

と織田沢が担当する。

ウェストンの資料はスライド化した

図書Ⅱ全十九巻内Ⅰ・Ⅱ期で三〇万円(Ⅲ期は今秋発刊予定)のマウンテン

ワールド日本語版が版元より寄贈される。

会報Ⅱ月号から使用活字を9ポに

し、十六ページとした。

婦懇Ⅱ一月二十六日に新年会とインドヒマラヤの会議を行なった。

青懇Ⅱアイスクライミングと山スキーの講習会を予定している。

総務Ⅱオリエンテーションの概略が決定した。五月二十日に総会を行なう。三国登山Ⅱ一月二十四日～二十六日カトマンズにて三国会談を行なった。これをもって実務会談、総指揮部会談は終了した。

二月六日登山委員会、壮行会を行なう。二月十五日に経費の集計を行ない、財務担当(西村)に引継ぐ。東京留守本部は鈴木理事が担当する。

*なお時間的に実行委員会が開けない

報告

「登山と水分補給について」講演会

医療・集会委員会

二月二十六日、ルームにて鈴木政登先生(慈恵医大臨床検査医学講師)による「登山と水分補給について」の講演が行なわれた。講演要旨は以下のごとくである。

まず体重の二% (大部分は水分) が失われると、のどの渇きを訴える。汗をかくということは、体温上昇を抑制するという事。暑いところで運動をすると、かなり心臓に負担がかかる。体温上昇は血圧を低下させる。これらの変化にはアルドステロン、アンギオテンシンというホルモンが絡んでくる。

こういった内容を各種データを示しながら、運動時の水分補給の必要性を説かれた。

ついで汗の成分のはなしから、「スポーツドリンク」の話題に入り、単に水を補給するより、Na、Kイオンを

ので上記の二名についての決定をこの理事会での決定に代えたい。(委員には手紙で報告する)

財務Ⅱ六十三年度予算案について第一回目の検討がなされた。

*村木副会長により評議員会よりの答申に関する説明がなされた。また今西会長より、これから理事の皆さんに答申の事項について充分検討していただきたい、との要望があった。



(2月)

- 1日 総務委員会、会報委員会
- 2日 図書委談話会
- 4日 婦人懇談会、学生部委員会
- 5日 理事会
- 8日 総務委員会
- 9日 山岳編集委員会、学生部指導委
- 10日 海外委員会

含む水の方が吸収し易いことを実験結果を示して説明された。また脱水時には生理的に必要以上には水を飲むことは出来ない。従って、飲みたいだけ飲ませて生体の収支バランスが合うという。

最後に脱水に対するトレーニング効果について話された。平地でのトレーニングの際、水分補給を制限して運動負荷をすると、必ずしも水分補給を必要とはしなくなるという。

結論として、水場のあるところでの山行では敢えて水制限をする必要はない。水場のない山行では、炊事で水を使うので水制限をしなければならぬ。水制限をして、パテパテになった人の水分補給は、「スポーツドリンク」が効果的で、なければ水に食塩を加えるだけでも効果的である。

なお、当日の参加者は三十五名であった。また講演開催に際し、会員の大塚製薬、井野記男氏のお力をお借りした。

(文責・浜口欣一)

- 17日 三水会
- 18日 科学委講演会
- 22日 総務委員会、図書委員会、フィ
- ルム委員会
- 23日 婦懇講習会
- 26日 医療委講演会
- 27日 資料委員会
- 29日 総務委員会、自然保護委員会

会員異動 2月

退会

- Shiomi Wilson (五九三〇)
- 沢村健太郎 (八五九六)
- 大野 規子 (九六三七)
- 金田 正樹 (九三七八)
- 山中 明彦 (七三五五)
- 物 故
- 兼平 治水 (七〇〇五) 2・5
- 谷 博 (一四八四) 2・8
- 海外在住休会
- 永目 洋子 (九四二二) ケニア

計 報

桑原武夫氏、享年八十三。四月十日、急性肺炎のため逝去。

「チョゴリザ頂上の人形」(平井一正) 校正中、この報に接しました。

編集

- 2

- 4 -

図書受入報告

図書委員会

昭和 62 年 10 月分受入図書

1. カムイミントラ編集室編「カムイミントラ」りんゆう銀行 1987 (版元寄贈)
2. 工藤茂美著「五能線沿線と白神山地の植物」秋田魁新報社 昭和 62 (著者寄贈)
3. 沢野ひとし編「僕はやっぱり山と人が好き」山と溪谷社 1987 (版元寄贈)
4. 根深誠著「津軽白神山がたり」山と溪谷社 1987 (版元寄贈)
5. 山の気象研究会編「山の気象研究会論文集」山の気象研究会 昭和 62 (版元寄贈)
6. 高木泰夫著「奥美濃」ナカニシヤ出版 昭和 62 (版元寄贈)
7. 山と溪谷社編「日本の名峰 500」山と溪谷社 1987 (版元寄贈)
8. 後藤幹次著「若い頃の記録写真」後藤幹次 1985 (著者寄贈)
9. 福岡山の会編「せふり 1-4 巻」福岡山の会 昭和 7-18 (村上巖氏寄贈)
10. 後藤昌美著「大雪残象」京都書院 昭和 62 (版元寄贈)
11. 慶応義塾山岳会編「登高行 原装復刻 第1年-17年・別冊」出版科学総合研究所 昭和 62 (出版科学総合研究所・日本専門書販売寄贈)
12. 豊島山岳会編「巻機山研究」豊島山岳会 昭和 54 (石井貞男氏寄贈)
13. 南会津山の会編「創立 30 周年記念 みなみあいづ」南会津山の会 昭和 62 (版元寄贈)
14. 岡田紅陽他著「富士山」新潮社 1987 (松田雄一氏寄贈)
15. 木下是雄著「物理・山・ことば」新樹社 1987 (著者寄贈)
16. 柴崎徹著「画文集 仙山線から見える山々」柴崎 徹 1971 (著者寄贈)
17. 岡沢祐吉著「スイス山案内の手帳より」ベースボールマガジン社 1987 (著者寄贈)
18. 日本山岳会静岡支部編「もみじ会 山と人」日本山岳会静岡支部 昭和 62 (版元寄贈)
19. 小西政継著「小西政継ボクのザイル仲間たち」山と溪谷社 1987 (版元寄贈)

11 月分受入図書

1. 猪俣克己著「大吹谷の女郎墓改訂版」ささゆりの会 昭和 62 (魚本定良氏寄贈)
2. 宮本周三著「遷けき空に近ければ」田代書店 昭和 62 (著者寄贈)
3. 本多勝一著「山とスキージャングルと」山と溪谷社 1987 (版元寄贈)
4. 日本ヒマラヤ協会編「神の山ゲニ峰」日本ヒマラヤ協会 昭和 62 (編者寄贈)
5. 日本山岳会熊本支部編「熊本支部設立 30 周年記念誌」日本山岳会熊本支部 昭和 62 (編者寄贈)
6. 西澤憲一郎著「ネパールの社会構造と政治経済」勁草書房 1987 (著者寄贈)
7. 長崎幸雄著「わが白山連峰」北国出版社 昭和 62 (古川脩

氏寄贈)

8. 日本山岳会図書委員会編「望月達夫文庫目録」日本山岳会 1987 (版元寄贈)
9. 金子民雄等著「中央アジア探検家列伝」日本山岳会海外委員会 1987 (版元寄贈)

12 月分受入図書

1. 鳥居亮著「山岳地帯における自然エネルギー利用の実用化」丹水会 昭和 61 (古谷聖司氏寄贈)
2. 本多勝一著「山登りは道草くないながら」実業の日本社 昭和 63 (版元寄贈)
3. 小島鳥水他著「山の風景・画・文・集」挿画社 昭和 11 (不明)
4. 中央大学校友会体育連盟編「年報 7」中央大学校友会体育連盟山岳部 昭和 50 (不明)
5. A.F. マンメリー著・石一郎訳「アルプス 及 コーカサス 登攀記」朋文堂 昭和 13 (不明)

昭和 63 年 1 月分受入図書

1. 梶安延著「雷鳥の尾根」誠文堂新光社 1987 (版元寄贈)
2. 鎌田孝一著「白神山地に生きる」白水社 1987 (版元寄贈)
3. ボナッティ著・横川文雄訳「大いなる山の日々」白水社 1987 (版元寄贈)
4. 片平六左著「吾妻山に死す」片平六左 昭和 62 (国分恒司郎氏寄贈)
5. 栃木県山岳連盟編「栃木の沢」栃木県山岳連盟 昭和 62 (渡辺宏之、坂口三郎氏寄贈)
6. 斎藤正彦編「森と文化」東京大学出版会 1987 (版元寄贈)
7. W. ウェストン著「ウェストン明治見聞記」新人物往来社 昭和 62 (版元寄贈)

2 月分受入図書

1. 朝日新聞北海道支社報道部「北海道自然 100 選紀行」北海道大学図書刊行会 1987 (版元寄贈)
2. 地学団体研究会大阪支部編「おおさか自然史ハイキング」創元社 1987 (版元寄贈)
3. 文部省登山研修所編「登山研修 Vol. 1 文部省登山研修所 1985 (編者寄贈)
4. 文部省登山研修所編「登山研修」Vol. 2 文部省登山研修所 1987 (編者寄贈)
5. 徳義三男著「国有林を考える」につかん書房 (版元寄贈)
6. 日本大学ヒマルチュリ登山隊編「HIMAL CHULI 7893m」日本大学ヒマルチュリ登山隊 1987 (編者寄贈)
7. ダヴィッド・バイ著・杉田博訳「マロリー追想」日本山書の会 昭和 62 (版元寄贈)
8. 風見武秀著「世界の山稜・風見武秀写真集」グラフィック社 1988 (著者寄贈)
9. Roger Mear Robert Swan "In the footsteps of Scott" Jonathan Cape 1987 (Robert Swan 氏寄贈)
10. J.I.M. Curran "K₂ Triumph and tragedy" Hodder & Stoughton 1987 (岩淵泰郎氏寄贈)

お知らせ

本会々員、吉田興和氏のご厚意により、本会々員に限り、高輪プリンス・ホテル、並びに新高輪プリンス・ホテルを左記のような特別料金で宿泊することが出来ますのでお知らせ致します。特に、地方会員各位等のご利用を戴ければ幸いです。

宿泊ホテル..

〒108 東京都港区高輪三十三一

(両ホテルとも住所は同じ)

高輪プリンス・ホテル

(電話) 〇三―四四七―一一一

新高輪プリンス・ホテル

(電話) 〇三―四四二―一一一

J R 品川駅前 徒歩五分

期日..昭和六十三年一月一日(金)よ



☎ 234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

●若葉会山行

集會委員会では山形支部の協力により左記の通り若葉会山行を行ないます。

り昭和六十三年十二月三十一日(土)まで

室料..シングル・ルーム、一〇〇〇円

ツイン・ルーム一三〇〇円

(ともに税金、サービス料込み)

予約方法..宿泊希望者は直接ホテル予約係に予約を入れて下さい(予約状況によっては、ご希望のタイプの部屋がとれない場合がありますので、予め、早めにご予約をお入れ下さい)

予約先..高輪、新高輪プリンス・ホテル

宿泊予約係

特別専用電話 〇三―四四九―一七六一

備考..チェックインの際は、必ず日本山岳会の会員証をご提示下さい。

日時 五月十四日(土)・十五日(日)

場所 西吾妻山

コース 白布高湯↓天元台↓西吾妻山
集合 五月十三日(土) 午前七時
白布高湯集合

○なお、東京からの参加者にはバスの手配を致しますので、新宿に十二日午後十時集合となります。

※詳細案内を送りますので希望者は事務局に連絡下さい。

集會委員会

●第八回日本登山医学

シンポジウム

今年も左記の要領で、登山医学シンポジウムを開催します。この会は医者に限らず、登山医学全般及びそれに関係する種々の事に興味のあるひとで構成されています。今年もいろいろな分野からのご発表をお待ちしています。

記

会長 田中 壮佑

多野総合病院脳神経外科

日時 六月十一日(土)午後一時—十二日(日)

会場 群馬県水上温泉「去来荘」

TEL 0288-72-6311

参加費 会場費、宿泊費、懇親会費込み一万三千元

(会員六十三年度会費三千元)

特別企画

1、シンポジウム「登山の危険とむずかしさ」

2、冬期アンナプルナ南壁(群馬県山岳連盟)

3、古いヒマラヤ登山の記録映画

懇親会 六月十一日(土) 去来荘宴会場午後七時

演題募集 医学に限らず色々な分野からの発表をお待ちしています。一般演題を十分、シンポジウム二十分。四月三十日までJAC事務局までお申込み

下さい。

なお、本シンポジウムに参加し、話をお聞きになりたい方の参加申込みは、五月二十日までJAC事務へ。

後援 群馬県、群馬県教育委員会、上毛新聞社、群馬県山岳連盟

事務局 〒375 群馬県藤岡市藤岡九四二—

多野総合病院脳神経外科内 田中壮佑 0274-22-3311 内線 3340, 3341

医療委員会・浜口欣一

●山岳映画の会予告

日時 六月上旬

場所 山岳会ルーム

タイトル 「栄光最後の記録」

一九八二年十二月、厳冬のエベレストに初の単独登頂を果たし、帰路行方不明になった加藤保男氏の記録映画です。日時の詳細は次号で。

(お礼とお願い) 昨年十一月、会報509号でお願いしました「日本の山」のスライドは多くの方々のスライドご提供で第一シリーズ総集編が出来る運びとなりました。今後は地域別にシリーズを作る予定にしておりますので更に引続きご協力下さるようお願いいたします。

ご提供下さいました方に紙面を借りお礼申し上げます。

フィルム委員会

●講演会

日時 五月三十日(月)

山研

●上高地山研開所

今年の山研は四月三十日(土)から開所します。開山祭(バス開通日)は二十七日になります。新緑の上高地、残雪の穂高が会員の方々をお待ちしています。

(利用料金)

会員 一、八〇〇円

非会員 二、八〇〇円

子供 一、〇〇〇円

食事(味噌汁、漬物、ご飯)は、一食四百円で用意しますのでお申し込み下さい。

(申込み先)

山研 0263-95-2533

山研委員会

場所 午後六時半よりルームで

演題 初めてのヒマラヤ

講師 沢野 公氏

高所登山研究委員会

●越後支部懇親登山

日時 六月十一日(土)、十二日(日)

場所 南魚沼塩沢町清水で宿泊、巻機山、清水峠

送迎 越後湯沢駅で十七時三十分発のバスを用意致します。

会費 一泊三食付 六千円程度

申込 新潟市営所通一 学生書房

電話〇二五—二二—九八七〇

※越後魚沼の銘酒「八海山」もお待ちしております。

越後支部

昭和六十三年四月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五—四

サンビエウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今西 寿雄

編集代表 岡 沢 祐吉

電話東京(03)四四三三

振替口座 東京三—四八二九番

東京都港赤区坂一—三—六

赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂